

プレースメントテストによる習熟度別 クラス編成に関する報告書

—全学共通言語コミュニケーション科目の英語における事例—

大谷麻美
横山仁視
キム・ブラッドフォード・ワッツ

1. はじめに

本学の全学共通言語コミュニケーション科目の英語授業では、2011年度よりプレースメントテストの結果に基づいた習熟度別クラス編成を導入した。本年度はその導入から3年目にあたる。当初、試行錯誤であったクラス分けの作業もかなり改善がなされ、その成果を判断するデータも集まりつつある。そこで本稿では、その導入に至るまでの経緯をまとめ、また、その成果と残された課題を考察し、今後の英語教育の改善に役立てようとするものである。

2. 全学共通言語コミュニケーション科目における英語

本学の1回生は、学部・学科に関わらず、外国語準学科による言語コミュニケーション科目の8単位が必修として課されている。その目標は、言語技能の向上にとどまらず、異文化に対する理解とそれに伴う自文化への洞察力の涵養にある。言語コミュニケーション科目は、英語と初修外国語（フランス語、ドイツ語、中国語、コリア語）から成り立ち、1回生は英語と初修外国語の中の1言語を選択のうえ履修しなくてはならない。いずれの言語も週に2回ずつの

授業から成り、ひとつは文法や読解に焦点を当てた授業で、もうひとつはオーラルコミュニケーションに焦点を当てた授業である。

その中でも、英語は表1のようなカリキュラムとなっている。IA1、IB1はリーディングを中心とした授業で、その担当は日本人教員である。一方、IA2、IB2はコミュニケーションを中心とした授業で、英語を母語とする教員（一部クラスを除く）によるものである。

表1 言語コミュニケーション科目の必修英語のカリキュラム

	1 回生	
	第1 Semester (前期)	第2 Semester (後期)
科目	英語 IA1 (リーディング)	英語 IB1 (リーディング)
	英語 IA2 (コミュニケーション)	英語 IB2 (コミュニケーション)

リーディングの授業（英語 IA1、IB1）の目的は、英語の読解ストラテジーを身につけ、必要な情報を素早く読み取れるようになることはもちろんのこと、それと同時に異文化についての理解を深めることを特に重視している。そのため、異文化理解や異文化間コミュニケーションに関するエッセーを読みつつ、議論などを通じて英語圏を中心とした異なる文化と自文化に関する広い視野を養うための授業を展開している。また、コミュニケーションの授業（英語 IA2、IB2）では、英語を母語とする教員とのやり取りを通じてリスニングとスピーキングに必要な基礎的スキルを身につけるとともに、日本語とは異なる英語のコミュニケーションスタイルを理解することを重視している。

3. プレースメントテスト導入に至る経緯

3.1 2011年度以前

プレースメントテストによる習熟度別クラス編成が導入されたのは2011年度である。しかし、それ以前も、英語クラスは名目上は Basic（基礎）、General（標準）、Advanced（上級）の3つの難易度のコースに分かれていた。各学科

は（ただし児童学科と教育学科音楽教育専攻、教育学科心理学専攻と教育学科教育学専攻、生活造形学科と生活福祉学科は合併）、その学科定員に応じて1回生を4から9つのクラスに分けて授業を行っており、クラスの内訳はいずれの学科においても Basic を1クラス、Advanced を1クラスとし、残りを General としていた。学生は、新入生オリエンテーションの期間に、言語コミュニケーション科目の手引書『IRIS』を参考にして自分の受講したいコースの希望を提出し、教員がその希望に極力添うようにコース分けを行うという制度であった。

この制度の導入は現在の英語教員が赴任する以前のことであるが、その導入理由としては、おおよそ以下の3点であったと聞いている。1) プレースメントテストなどによる客観的データに基づくコース分けを行った場合、習熟度が低いクラスに振り分けられた学生の学習意欲をすぐ危険性があり、それを避けたい。2) 一方で、授業効果を考えると、ある程度の習熟別にクラスを編成したい。3) レベルが違う学生が混ざり合い、相互に助け合い、学び合うことで学習効果を高めるピアティーチングを重視したい。

しかし、この方法にはいくつかの問題点も見られた。ひとつは、大学に入学したばかりの新入生に相対的、客観的に自分の学力を判断したうえで適切なコースを選択させることはかなり困難だという点であった。その結果、希望したコースが必ずしも本人の学力には合わない事例も多々見られた。実際に授業を開始してみると、いくつかのクラスの中にはかなりの学力差が見られた。たとえば、4月に全1回生に受験させるeラーニング教材のTOEIC演習テストの結果では、1クラスの中に400点近い点差が出たクラスもあった¹⁾。このような事態では、教員は授業レベルの焦点を合わせる事が難しく、結果として学習効率が悪くなる可能性があった。

さらなる問題としては、新入生の中には成績評価で不合格になることを恐れて、少しでもやさしいコースを希望しようとする傾向も見られた。その結果、最もやさしい Basic コースの希望者がその定員枠をはるかに超え、結局は希望のコースに入れない学生が続出するという有様であった。希望のコースを尋

ねておきながらも、多くの学生が希望通りのクラスに入れられないという事態は、入学して間もない新鮮な気持ちの学生の学習意欲をそぐことにもなりかねなかった。これらの事態を改善すべく、プレースメントテストによる新たな習熟度別クラス編成を検討することとなった。

3.2 新制度検討の過程

外国語準学科では、2010年3月に新たな習熟度別クラス編成を検討するワーキンググループ（メンバー：大谷麻美、西村秀人、土井ギーゼラ、セーラム・ヒックス）を立ち上げ、7月までかけてその検討を行った。

このグループでは、上記のような従来 of 制度の問題点を確認したうえで、他大学の習熟度別クラス編成の実態を参考にしようと試みた。プレースメントテストなどの統一テストに関する大掛かりな調査には杉森（2003）がある。杉森は、統一テスト（プレースメントテストも含む）に関する調査を全国208の大学・短期大で行っている。その結果によると、2002年の段階で、何らかの統一テストを行っている4年生大学は64%にのぼり、その内の55.7%は、その目的を習熟度別クラスの編成のためのプレースメントテストであるとしている。しかし、杉森の調査の焦点はプレースメントテストを含めた統一テストの実施状況を明らかにすることで、習熟度別クラス編成の功罪にまでは踏み込んでいない。そこでワーキンググループでは、他大学の習熟度別クラス編成の実施状況とその課題について独自に簡単な聞き取り調査を行った。調査は、知り合いの教員を通じて16大学・学科の実態をたずねる極めて小規模なもので、その結果を一般化することは難しいが、一方で知人を通じているため、一般には外に出にくい詳細な内情などを聞き出すことができた利点もある。（表2, 3）

プレースメントテストによる習熟度別クラス編成に関する報告書

表2 他大学の新生に対するプレースメントテストの実施状況

☆は英語を専門とする大学・学科

大 学	テストの 実施状況	テストの種類	費用	備 考
A 大学 (私立)	実施	ECPT(ECC)	無料	ECC の授業を外注しているため
B 大学 (国立)	実施	?	?	
C 大学 (私立)	実施	旺文社	500円	
D 大学 (私立)	実施	STEP+	2600円	
E 大学 芸術学部 (私立)	実施	?	?	
F 大学 (私立)	実施	自作	無料	
G 大学 (私立)	実施	自作	無料	
H 大学 国際学部 (私立)	実施	G-TELP	3150円	
I 大学 (私立)	実施	CASEC	3500円	
☆ J 大学 留学プログラム (私立)	実施	Michigan Placement Test (Listening, reading, grammar) と過去の TOEFL Test (Writing etc.)	無料	
☆ K 大学 英語英文学部 (私立)	実施	CELT5 (Listening) 過去の入 試問題 (Reading)	無料	
☆ L 大学 (私立)	実施	自作	無料	
M 大学 (国立)	していない			
N 大学 (私立)	中止	自作	無料	2008年から中止
E 大学 工学部 (私立)	中止			
☆ H 大学 外国語学部 (私立)	中止	G-TELP	3150円	

表3 他大学のプレースメントテストに対する評価

☆は英語を専門とする大学・学科

大 学	テストの 実施状況	利 点	欠 点
A 大学	実施		テストは明らかに学生の英語の技能の全てをカバーできていない。
B 大学	実施	テストにはバイアスがかからず、整合性がある。	専攻に関係なく同じテストを行うので、全体の点は低い。
C 大学	実施	中上級クラスは教えやすくなった。	下のレベルは教えにくくなった。やる気のない学生が固まり、活気がなく、クラスを引っ張る学生がいなくなったため。中学レベルのことが分からない学生を下レベルに集め復習をしたが、学力が付いたとは言えない。結局、中学レベルがわからない学生は、同じことを何度やっても分からないようだ。そういう意味でクラス分けは、中・上級の学生をさらに伸ばすには効果的だが、下の学生にはあまり効果はなかった。ただ、下の学生にも何か違うアプローチで教えれば効果があるのかもしれない。
D 大学	実施	学生のレベルがそろい、授業がやりやすくなった。	
E 大学 芸術学部	実施	英語力が工学部のトップよりかなり上であるので（平均 TOEIC500弱）、工学部に見られた問題はない。 【工学部については下記参照のこと】	
F 大学	実施	以前は、学生のレベルの幅が広く教材選定や教え方が難しかったが、教えやすくなった。上位学生からの不満が減った。	下のレベルの学生がやる気をなくし、劣等感を持つ。
G 大学	実施	テストは比較的正確。	勉強したくないためにわざと低いクラスに入るように解答する学生がいる。
H 大学 国際学部	実施	あまりない。	プレースメントテストはあてにならない。授業を始めてみると、できる学生が下のクラスにいたり、上級クラスにできない学生が混ざっている。
I 大学	実施	能力別のクラスで教えやすい。	テストの実施が大変。お金がかかる。

プレースメントテストによる習熟度別クラス編成に関する報告書

☆J大学 留学プログラム	実施	学生は様々な英語の技能を測れる。また、writing と speaking の問題はかなり客観的に測れている。	
☆K大学 英語英文学部	実施	テストはうまく機能している。	学生が一年間レベルを変えられない柔軟性のなさが問題。
☆L大学	実施		テストの点数全体でクラス分けすると、どれか一つの能力だけの優れた学生(例：reading だけ得意、listening だけ得意)は、適切ではないクラスに振り分けられる。
M大学	していない		
N大学	中止		テストに信頼性があるかどうかかわからない。
E大学 工学部	中止		学生の点数が低い得点層に固まっているので、成績順に分けると人数のバランスが悪い。7割とれている学生が学科で1, 2人程度、あとは4割以下。問題が初歩的なため、点数がよくても低学力学生の域をでない。得点分布で分けると上のクラスでは人数が少なく、下に行くほど多くなってしまいますので、人数のバランスがよくなるようにクラス分けをしてみました。その結果、本来ならば上のクラスに入らないはずの学生が上のクラスに入ったため、そういう学生が安心したのか勉強しなくなった(中、高で上位クラスに入った経験のない学生なので上のクラスに来たことで有頂天になっていたような感じであった)。また、下のクラスの人気は少なくしてみたが、学力も学習意欲も自信もない学生が集まり、担当教員によると全く反応のない学生で授業がやりにくい上に、効果が見られなかったとのことである。そのため、本学工学部ではクラス分けは意味がないと判断し行っていない。
☆H大学 外国語学部	中止	あまりない。	【上記の】国際学部と同じ事態が生じたので、無意味と判断し廃止した。

この聞き取りから明らかになった点は、以下のとおりである。

- 1) 16大学・学部のうち、12大学・学部でプレースメントテストの結果に基づく習熟度別クラス編成を実施している。このうち11校は私立大学であった。また、現在は中止しているものの一度は実施した経緯を持つ大学・学部が3つあった。一方、これまでも、現在も全く実施していない大学は1校のみで、これは偏差値が76-62と比較的高い国立大学であった。
- 2) 実施している12校中8校は、プレースメントテストによる習熟度別クラス編成の結果「教えやすくなった」などの好意的評価を行っている。
- 3) プレースメントテストによる習熟度別クラス編成は、中・上級のレベルの学生には比較的評判が良い。
- 4) 一方、習熟度の低いクラスは教えにくくなったり、そのクラスに振り分けられたことで学生が劣等感を持つ場合がある。
- 5) 実施していない大学や、中止した大学からは、テストの信頼性に疑問を呈する声があった。

ワーキンググループでは、これらの結果を本学の状況と照らし合わせ、プレースメントテストによる習熟度別クラス編成を以下のように判断した。

- 1) 多様な入試制度のために学生の学力差が大きくなっている私立大学では、プレースメントテストによる習熟度別クラス編成を効果的と捉えている場合が多い。そのことから、類似の状況にある本学にも、同様の効果が見込めると考えられる。
- 2) 本学には、英語の学力が高い学生や留学などを目指す学生も一部おり、これら中・上級レベルの学生からは、導入した場合は特に良い評判が得られる可能性が高い。
- 3) 導入する場合は、習熟度の低いクラスの学生に対する注意深い配慮が不

可欠である。

4) 導入する場合は、適切なテストを選択することが極めて重要となる。

これらの結果を踏まえてワーキンググループは、テストの慎重な選択と、習熟度の低いクラスへの配慮を怠らないことで、プレースメントテストによる習熟度別クラス編成は従来の制度以上に教育効果が見込めると判断した。

3.3 テストの選択

上記の結果にもあるように、テストの選択がこの制度の成否の大きな要因となる。ワーキンググループと英語教員は、日本で入手可能な6つの英語テストを、その信頼性、妥当性、実用性の3点から検討した。(表4)

表4 候補テストの比較

テスト名		ACE Placement	G-TELP レベル4	G-TELP レベル3	ゴートウスケール・ドット・コムプレースメントテスト	TOEIC	TOEIC Bridge
会社		(NPO)英語運用能力評価協会	G-TELP 日本事務局	G-TELP 日本事務局	ゴートウスケール・ドット・コム	(財)国際ビジネスコミュニケーション協会	(財)国際ビジネスコミュニケーション協会
信頼性	信頼度係数	0.8以上	0.8以上	0.8以上	0.8以上	0.8以上	0.8以上
妥当性	テストの内容	◎	○	○	△	×	△
	リスニングテストの有無	有	有	有	無	有	有
実用性	費用 (1人当たり)	945円	1323円	1764円	不明 (条件に合わないため尋ねなかった)	4040円	4200円
	試験時間	60分	65分	75分	60分	120分	60分
	データ返却までの時間	○ (中1日)	○ (中1日)	○ (中1日)	×	×	×

テストの結果に一貫性と安定性があるか否かを示す信頼性については、検証対象とした6つのテストは、いずれも各テスト会社から発表されている信頼性係は0.8以上で、信頼性はあると判断した²⁾。

また、テストの妥当性として、テスト内容が学生の習熟度を測るのに適した内容であるか、また、クラス分けに適した点数の分散が期待できる問題であるか否かを検証した。テスト内容の条件として、そのテスト内容が、学生が中学・高校で学んできた日本の学習指導要領の範囲をカバーするものであることを重視した。その結果、就職活動などでよく使用される TOEIC は、ビジネス場面における英語の運用能力を見る問題が多く、大学新生にはその文脈がわかりにくく、今回の目的には適切ではないと判断し排除した。さらに、英語母語話者教員によるコミュニケーションクラスを考慮して、リスニング能力が測れることを条件とした。その結果、ゴートゥースクール・ドット・コムはリスニング問題がなく検討から外れた。また、点数の分散に関しては、適度な分散が出るためには、問題にある程度の難易度の幅があるものが適切と考えた。その結果 G-TELP レベル 3 は易しすぎ、G-TELP レベル 4 は難しすぎて十分な分散が得られないと判断した。

実用性としては、テスト結果が返却されるために要する日数、試験時間、そして費用の3点を考慮した。そのいずれの点でも TOEIC Bridge は不適切と判断した。

これらの結果から、すべての条件を満たすテストとして (NPO) 英語運用能力評価協会の ACE Placement が選択されるに至った。

以上の検討結果をもとに、プレースメントテストによる習熟度別クラス編成の導入を教務委員会に申請し、2010年7月の教務委員会において承認された。

4. テストの結果と成果

4.1 テストの結果

2011年度から導入したプレースメントテストの成績結果は、表5のとおりで

ある。毎年の新入生の学力を定点観測する意味で、開始から3年間、同じ問題を使用している。(問題は、試験後、回収の上破棄)本テストは300点満点であるが、平均点、標準偏差、点数の最大値は3年間ほぼ同じであった。最小値は、2012、2013年は20点台と極端に低い、このように極端に低い学生はいずれの年も1人ずつで、体調不良などにより途中退席した学生と思われる。

表5 プレースメントテストの記述統計

年度	人数	平均点	標準偏差	最小値	最大値
2011	1540	195.6	34.2	94	286
2012	1583	195.0	35.8	22	295
2013	1546	194.2	36.0	27	286

どの年度においても標準偏差が35前後あることから、クラス分けを行うには十分な点数の分散があると考えられる。

この結果を受け、4月の授業開始前に、専任教員が点数順に Introductory、Intermediate、Advanced の3つのコースに学生のクラス分けを行っている。その際、クラス人数を単純に均等割するのではなく、習熟度の低い Introductory コースでは極力クラスサイズが小さくなるように、また、点数の大きなギャップが見られる箇所クラスを分割することで1クラス内の学力に極力開きが出ないように、などの細かな配慮をしながら分割している。2011年度の各クラスの点数分布は以下のとおりである。レベル1はもっとも習熟度の低い Introductory で、レベル番号が最も大きいクラスが Advanced である。

表6 学科専攻ごとのクラス分け結果と点数幅 (2011年)

	文学部			発達教育学部		家政学部		現代社会学部	法学部
	国文学科	英文学科	史学科	教育学科		食物栄養学科	生活造形学科+生活福祉学科	現代社会学科	法学科
				教育学専攻+心理学専攻	音楽教育学専攻+児童学科				
クラス数	6	5	6	6	6	5	7	9	4
level 1	100-149	124-185	94-143	101-156	94-153	121-170	107-150	98-137	117-175
level 2	149-186	185-205	145-167	159-173	158-175	172-191	150-168	138-158	176-193
level 3	166-179	209-225	168-188	174-185	177-189	192-210	171-185	159-170	194-221
level 4	189-197	225-244	189-200	186-197	189-204	211-229	186-197	171-179	222-272
level 5	198-217	244-286	202-220	198-210	204-227	232-286	198-209	180-187	
level 6	218-268		222-267	211-226	229-272		209-225	188-199	
level 7							226-257	200-213	
level 8								214-230	
level 9								230-271	

4.2 予見された問題への対処法

先述の他大学への聞き取り調査の結果、本制度で課題となるのは、習熟度の低いクラスへの対応であることが明らかとなった。そこで、本学では、一番下の Introductory コースの授業は極力専任教員が担当することとした。専任教員はプレースメントテストの弊害をよく理解したうえで学生に接することができ、また、時間外の質問や補習に対応しやすいためである。2013年度の各コースの専任・非常勤率は以下の通りである。

表7 各コースの専任・非常勤率

コース	クラス数 (リーディングと コミュニケーション合計)	専任/非常勤 担当クラス数	専任/非常勤率
Introductory	18	7 / 11	39% / 61%
Intermediate	74	12 / 62	16% / 84%
Advanced	18	3 / 15	17% / 83%

その結果、Introductory コースの専任率は39%となり、他のコースの16-17% の2倍以上となっている。39%は全く十分な数字ではないが、本学の必修英語の開講クラス数110クラスに対し英語専任教員は4人であるため、時間割や出講日を考慮すると、物理的にこれ以上の増加を見込むことができないのが現状である。残された60%あまりのクラスでは、非常勤講師の中でも特にこのようなクラスの指導に長けていると思われる教員をあてがうことで対応して

いる。今後はさらに、時間割の見直し、非常勤との授業方法の情報交換などでこの課題を改善してゆく必要があると考える。しかし一方で、全体で専任率が20%、裏を返せば非常勤依存率が80%の不健全な教員比率にも問題の大きな要因があることも付け加えておく必要がある。

さらに、もうひとつ予見されていた問題は、配属されたコースに不満を持つ学生の出現である。これに関しては、前期は変更を認めないものの、後期授業開始の段階で、希望する者にはコース変更を検討することとした。英語会議で、前期の成績を鑑みて、変更に合理性が認められると判断した者に関してはコース変更を許可することとした。この制度を利用してコース変更を行う学生は毎年10名前後である。その中には、下のコースへの変更を希望する者だけでなく、上のコースへ移動する向上心のある学生も毎年存在する。全学生数の1%にも満たない数字である点を考えると、テスト結果によるコース分けへの不満は比較的少ないと考えられる。

4.3 不合格者数の推移

次に、プレースメントテスト導入前後での不合格者数の推移を分析する。テストによる習熟度別クラス編成が効を奏し、学習効果が上がっているとすれば、制度導入以前と比較して、導入後は不合格者の数が減ることが予測できる。そこで、プレースメントテスト導入前後各3年間の不合格者数を比較した。

表8 不合格者数の推移

年度		導入前			導入後		
		2008	2009	2010	2011	2012	2013
前期	延べ受講者数	2664	2589	2691	3099	3145	3093
	延べ不合格者数	90	97	72	78	61	60
	不合格者割合(%)	3.4	3.7	2.7	2.5	1.9	1.9
後期	延べ受講者数	2687	2636	2705	3070	3123	—
	延べ不合格者数	146	126	155	156	150	—
	不合格者割合(%)	5.4	4.8	5.7	5.1	4.8	—

表8は、週2回の英語クラス（リーディングとコミュニケーション）の延べ受講者数、延べ不合格者数、不合格者の割合を比較したものである。上級生の再履修者を省き、新入生だけを対象にしたものである。不合格者の割合は、導入前と比較して導入後は前期でその減少が認められる。導入前3年間の不合格者割合は3.4、3.7、2.7%で、平均で3.3%であった。それに対し、導入後の3年間は2.5、1.9、1.9%で、平均は2.1%である。導入後には平均1%余りの減少となり、これは不合格者が延べ30人余り減少したことを意味する。これには、プレースメントテストによって学生をより適したクラスに配置できたことによる成果が大きいと考えられる。1回生前期は大学生生活へ適応できるか否かの特に重要な時期であり、この時期に、習熟度に見合った適切なレベルで授業を受けられることは、英語の学習効果の面はもちろんのこと、新入生の大学生生活への不安や不満を取り除く意味でも大きな効果があると考えられる。

一方で、後期については2013年のデータが未だ無いため厳密なことは言えないが、2012年度までの2年間の数字では、不合格者割合は、導入前後でほとんど変わっていない。その要因は、プレースメントテストの後の1年間の各自の学習の進み具合により、テスト直後の前期よりもクラス内で学力の差が広がり、習熟度別クラス編成の成果が出にくくなったのではないかと考えられる。この問題を解決するには、後期授業の開始前に改めてプレースメントテストを行う方法も考えられよう。しかし、試験の時間やコストの面からも、それに見合う成果が望めるかは今後検討が必要である。

4.4 選択科目履修者数の推移

本節では、2回生の選択科目の英語受講者数が、プレースメントテストの導入前後でどのように推移しているかを見る。本学では、2回生以降では英語は選択科目となり、さらに学習を希望する学生のために英語II A/B 1～3、英語III A/B 1～3が開講されている。我々は、この選択科目の受講者数を、学生の英語学習への意欲を示すひとつのバロメータとしてこれまでも注視してきた。そして、1回生の必修授業の在り方が、2回生以降の学習意欲の有無に大

大きく影響すると考えている。つまり、必修授業で学生を英語嫌いにせず、英語への興味や関心を掻き立てることができれば、おのずと2回生以降の選択英語受講者数も増えるのである。そして、そのためには、1回生で、学生が各自の学力に応じた適切なレベルの授業を受けられることは極めて重要と考える。以下の表9は、2回生向け選択科目の英語IIA1～3（前期）とIIB1～3（後期）の受講者数の推移である。

表9 2回生の選択英語科目受講者数

年度	導入前			導入後	
	2009	2010	2011	2012	2013
2回生数	1327	1315	1298	1546	1586
前期受講者数	430	385	375	701	740
割合(%)	32.4	29.2	28.9	45.3	46.7
後期受講者数	101	93	166	269	363
割合(%)	7.6	7.0	12.8	17.4	22.9

2011年度に導入したプレースメントテスト制度を経た学生が2回生になるのは2012年度である。そこで2012年度の前後で選択英語受講者数を比較すると、前期については、導入以前が30%前後であったのに対し、導入後は45%余りと明らかに増加している。後期は、導入前が7～12%であったのに対し導入後は17～22%前後と、こちらも増加している。これがプレースメントテストの成果によるものだけであるとは言い切れないが、2012年を境に大きく変化していることを考えると、本制度がなんらかの好ましい影響を与えたものと予想できる。本学では必修英語が1回生だけであること、一方で外国語の習得には継続的な学習が不可欠であることを考えると、必修ではないものの、2回生以降も極力学習を続けることが重要であることは言うまでもない。本制度は、このような継続学習への動機づけという点ではかなりの成果を上げていると言える。

4.5 教員へのアンケート結果

プレースメントテスト導入前後の授業運営上の相違を、実際に授業を担当し

ている非常勤講師にアンケートで尋ね、その効果を検証した。アンケートの実施はテスト導入の半年後、2011年度前期が終了した時点であった。導入前後の違いが比較できるように、非常勤講師の中でも導入以前の2010年度から継続して勤務している者、かつプレースメントテストの結果が反映される必修の英語授業を担当している者に協力を依頼した。その結果、14名の非常勤から回答を得た。以下が回答結果である。

問1 プレースメントテストでクラス分けをしたことで、昨年度と比べクラス内の学力差はどうなりましたか。

大きくなった 0 小さくなった 8 同じ 1 わからない 5

問2 プレースメントテストでクラス分けしたことで、昨年度と比べ指導がしやすくなりましたか。

しにくい 0 しやすい 8 同じ 3 わからない 3

非常勤講師の半数以上がクラス内の学力差が小さくなり、その結果、指導がしやすくなったと感じていた。ただ、学力差や指導のしやすさについて違いがわからないと答えた者も少なからずいた。このようにわからないと答えた教員は、比較的中・上級レベルのクラス担当で、逆に低いクラスの担当者はいずれも好意的な評価を行っていた。このことから、本制度は、特に習熟度の低い学生を指導する際に、学力に大きな差が出ず教えやすさが増すと言えるであろう。

また、自由記述の欄では以下のように導入に関する肯定的意見と否定的意見が見られた。

問3 上で「しやすい」「しにくい」とお答えになった方は、それは具体的にどのようなところで感じますか。

【肯定的意見】 (回答本文はそのまま)

- ・I noticed that I did not have so many lower level students as before.

However there are still one or two who find basic English very difficult. I have one student who got 0 in her written test.

- Students seemed to do similarly well in tests and quizzes etc, not so many really bad or really good scores. Students seemed to understand lessons better too.
- 教室内での指導そのものは、前年度も今年度と同じ位しやすかったのですが、遅刻・欠席が顕著に減りました。各生徒の英語の習得度に応じてクラス編成をされるのは、大変よいことだと存じます。今後も継続して下さいますようよろしくお願い致します。
- 昨年まで、英検準1級を取得している学生から、何の単語も正しく綴れず落第する学生まで幅広くいたため、一部の学生にとってはわかりきっている話を延々とせざるをえない一方で、一部の学生には全く理解できない説明も要する場合があります、英語学習へのモチベーションを作るのが難しかったです。プレースメントテストの導入によって学力差が小さくなっただけでなく、運悪く希望でないコースをとるはめになって1年を棒に振った再履修生というのが、いなくなるのではないかと楽観しています。小さなことではありますが、それをきっかけに英語の授業に来なくなる場合もありますので、此のたびプレースメントテストが導入され、喜んでおります。
- プレースメントテストは、学生の意識にも影響するのでよい刺激になると思いますし、あくまでも目安としてですが、特に新学期にどの程度から入れればよいか、いろいろな対応や準備も容易に出来ますので助かります。
- 担当クラスはベーシックでした。自己申請の場合、何らかの理由で自分の能力より下レベルのクラスを選び、結果授業中退屈そうにしている学生が観察できたように思います。今年は、退屈そうにして寝てしまう学生数は減りました。
- 学力のさも少なく、指導ポイントがしぼりやすくなりました。
- Advanced クラスの場合、学生の自信につながっている様子で良いことだと思う。

- ・学力のばらつきが小さくなったという点で（指導がしやすくなった）。プレースメントテストの結果だと思うが、昨年よりは点数差の開きが小さくなったと思われる。
- ・試験で際立って低い点数を取る学生が今年は全体的に少なかったように感じました。

【否定的意見】

- ・昨年度と今年は担当しているコースが異なりますので、比較できません。今年は、Intermediate ですが、あの程度の学力差であれば、教師のやり方次第で十分対応できるかと思います。
- ・日常的な指導においては、去年とさほど変わりはないと思います。
- ・クラス内の学力差が減ること、また下位（？）クラスに入ること、意欲を減じさせる学生も皆無ではありませんので、若干のマイナス面が残るように思えます。

本制度に関する評価はおおむね好評であるが、その利点としては以下の点にまとめることができるようである。

- 1) クラス内の学力差が小さくなり、指導効率が上がる。
- 2) 教員の授業準備や指導の焦点化がしやすくなる。
- 3) 成績順で分けられることが学生への刺激になり、また上位クラスの者は自信につながる。

1と2は、本制度導入の目的通りであり、最も期待をしていた点でもあった。3では、本制度が上位クラス者への自信につながるという利点が指摘されている。導入前は下位クラスの者への配慮ばかりが念頭にあり、このような利点はあまり期待していなかった。しかし、上位者の自信と下位者の劣等感、表裏一体の作用で、本制度は、上位者の今後の学習意欲の高まりにつながる可能性も大きいと言えるようである。

一方、以下のような否定的な意見も少なからずあった。

- 1) 本学の学力差程度であれば、本制度がなくとも対応できていた。
- 2) 下位クラスに入ることによる自信の喪失。
- 3) クラス内の学力差が減ることによる学生の意欲の低下。

2は、あらかじめ想定した通りの本制度の欠点である。専任や、この欠点をよく理解した非常勤が対応することで現在はカバーしようとしているが、今後、特に習熟度の低いクラスに配属された学生の意見などを直接聞く機会も必要であろう。また、3は同じクラスの習熟度の高い学生からの刺激を受けることで、低い学生の学びが促進されるピアティーチングの機会が減るという指摘である。習熟度別クラス編成から得られる利点と、様々な学力の学生が混ざったクラスでのピアティーチングから得られる利点のどちらにより効果が大きいかは、今後とも検証する必要がある。

4.6 ポストテストとの比較

プレースメントテストを導入する利点は、単に学習の効率化や授業運営のしやすさだけにとどまらない。定点観測的に新入生の学力を測定することでデータを蓄積し、その後の教育方針などを検討する材料とできる点にもある。さらに、入学時の学力が明らかとなれば、1年ないし2年の授業の後にポストテストを行うことで、本学での授業の効果を測ることもできる。現在は、その時間や経費を鑑みて全学生を対象としたポストテストは行っていないが、専任教員が担当するいくつかのクラスを対象に試験的にポストテストを実施し、1回生終了時の学力の伸びを計測している。選択したクラスは、法学部の1クラスと発達教育学部の教育学・心理学専攻の合同クラス2つの計3クラスで、いずれもIntermediateのコースである。このサンプルの選択の条件としては、まず、全学共通の必修英語授業以外にも多くの英語授業を受けている英文科を外すこと、本学で比較的平均的なレベルの学部・学科を選ぶこと、極力、同じ曜日・

時間に試験ができるクラスを選ぶことの3点を考慮した。試験は1回生の12月末に行い、問題はプレースメントテストと同じACE Placementの異なる版で、4月に用いたテストと平均点がほぼ同じものを用いた。学生に対しては、ポストテストの趣旨を1年間の学力の伸びを測るデータの収集であると説明した。

しかし、その成果が成績評価に反映されないため、残念ながら、学生には真剣にポストテストを受けたとは考えられない節が多々見受けられた。たとえば、テスト中に寝てしまう者、途中で解答をやめてしまう者なども少なからずあり、この成績結果の信憑性は薄く、平均点だけから見ると学生の成績の伸び、ひいては習熟度別クラス編成の効果を推し量ることはできなかった。

表10は、3クラスのプレースメントテストとポストテストの比較データである。このような受験態度であったため、当然プレースメントテストよりもポストテストのほうが平均点が低くなっている。しかし、詳細にみると、そのような受験状況にもかかわらず、両年とも、点数の最大値はポストテストで上がっている。これは、少なくとも上位者には学力の伸びが見られていることを示すものである。ただ、それが、今回のクラス分け制度、授業内容、もしくはその双方のいずれに起因するのかはこの調査だけからは明らかにはできない。

表10 プレースメント/ポストテストの記述統計

	人数	プレースメントテスト				ポストテスト			
		平均点	最大値	最小値	標準偏差	平均点	最大値	最小値	標準偏差
2011年度	85	212	272	159	31	209	276	137	32
2012年度	71	209	281	146	34	208	295	121	37

プレースメントテストは、単なるクラス分けの道具としてだけではなく、後のポストテストとうまく比較できれば、授業の成果や在り方を考える材料ともなりうる。その意味では、今後、ポストテストをどのように実施すべきなのか、特に、1年後の習熟度計測の正確性を期すためには、学生にポストテストを受験する意義づけをどのように示すことができるかが鍵となる。

5. 成果と課題

以上のように、コース変更者希望者の少なさ、不合格者数の減少、選択英語履修者の増加、教員アンケートで示された指導の行いやすさなどの点から見ると、本制度は、それ以前のクラス分け制度と比較しておおむね良い成果を出していると言える。しかし、未だ改善点も多く残る。今後に残された課題としては、大きくは以下の3点を挙げることができよう。

ひとつは、習熟度の低いクラスへの対応が未だ十分とは言えない点である。これらのクラスでは、学生は自信を喪失している可能性も高く、また、教員側もその指導には標準クラス以上に手間も時間もかかり負担が多い。現在は上記のように、本制度の問題点をよく理解した専任教員が極力担当することで対応しているが、いかんせん専任教員が少ないために物理的に限界がある。そこで、非常勤講師でも負担が少なく、かつ効果的にこれらのクラスを担当できるような仕組みを作る必要があると考える。そのためには、二つの点を明らかにする必要がある。まず習熟度の低いクラスに配属されたことにより、それらの学生にどのような情意的変化があったのかを明らかにする必要がある。自信や意欲を無くす場合と、逆に危機感を覚えて学習への意欲が高まる場合とが考えられるが、先他大学への調査結果では前者の可能性が高いと思われる。実際には、学生にアンケートを取るなどをして学生側の意見を聞く必要がある。さらに、習熟度が低いと一言で言っても、具体的に学力のどの部分に弱点があるのかも明確にする必要がある。これは、プレースメントテストの解答の分析からもある程度は可能であると思われる。そのうえで、これらのクラスにどのような指導や配慮が必要になるのかを検討してゆかねばならない。それらの検討結果に基づき効果的な指導法やカリキュラムを確立し、それをこれらのクラスを担当する非常勤講師にフィードバックすることで、非常勤でも負担が少なく安心して習熟度の低いクラスを担当できるようにすることが重要だと考える。

二つ目としては、習熟度が低いクラスのみならず、全クラスの習熟度と授業

内容や授業方法の整合性をさらに検討することが不可欠であろう。現在は、コースごとで教科書の難易度を変えて授業を行っている。しかし、先のアンケート結果からも、上位クラスの学生が本制度によって自信をつけているという指摘もある。これらの上位層の学習意欲をより高めることは、下位層への配慮と同等に重要なことである。これら学習意欲の高い学生の期待にどのように応えてゆくべきなのかを検討する必要があるだろう。具体的には教科書の選定だけではなく、学習目標をより高くする工夫や、何らかの評価を付加することで、彼らの学習をより促す工夫も可能であろう。プレースメントテストによる習熟度別クラス編成を行っても、各クラスのレベルとその後の授業内容が適切に連動しなければ意味はなさない。どのように授業方法や内容を充実させればより効果的に指導できるのかを、それぞれのレベルごとにその特質を踏まえながら考察してゆくことが重要となろう。

最後に、これは導入以前からの検討課題であったのだが、全体的な成績評価の在り方も課題として残っている。現在、本学ではコースレベルの高低にかかわらず、その成績評価方法は各クラス内での絶対評価によるものとなっている。しかし、これではクラスやレベルの枠を外して全学的に見た場合、その評価があいまいになってしまう。また学生も、習熟度の低いクラスに入って良い成績を取るほうが楽であると考えかねない。もし、プレースメントテストであえて手を抜いて意図的に習熟度の低いクラスに行く学生が増えれば、プレースメントテストが学生の真の学力を計測しているとは言えなくなり、この制度自体が形骸化する。そのために他大学などでは、習熟度別に評価基準を変える等の工夫を行っている事例も見られる。たとえば習熟度の低いクラスでは「優」をつけない、または、「優」の割合を制限する、また、ポストテストの点数を最終評価に組み込む（そのためには、少しでも高いレベルのクラスに入って勉強する方が有利となる）などの工夫が見られる。本学も、今後の検討が必要である。

6. まとめ

現在のプレースメントテストによる習熟度別クラス編成は、ようやく制度が整い動き出したところである。調査の結果、おおむね予想した通りの良い成果が見られている。一方、本分析により、残された課題も明らかになりつつあり、今後はそれらの解決に努めたい。また、一方で、本学のカリキュラムは、このような習熟度テストだけでは測れない、異文化に対する理解や寛容の教育にも重点を置いている。制度や点数に縛られ、これらの教育がおろそかになれば本末転倒ともいえる。その点を心して改善に努める必要がある。

謝辞

データの提供と取りまとめにご協力いただいた英語運用能力評価協会の白戸久氏、本学教務課の林雅純氏に、ここに記して感謝を申し上げる。

参考文献

- 小泉利恵 (2011). プレースメント・テストの有効性：2種類のテストの比較と学生の反応から 常磐国際紀要, 15, 1-15.
- 清水裕子 (2003). プレースメント・テストの結果分析—今後の課題にむけて— 言語文化研究, 14(4), 181-188.
- 杉森幹彦 (2003). 英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定および測定に関する実態調査の報告 政策科学, 10(3), 3-26.
- 田中正道 (2005). これからの英語学力評価のあり方—英語教師支援のために— 教育出版
- 前田和彦 (2009). 大阪商業大学におけるプレースメント・テストについての一考察—新しいプレースメント・テスト作成に向けて— 大阪商業大学論集, 5(1), 597-608.
- 吉田弘子 (2009). 英語プレースメントテスト分析—言語テストの観点から— 大阪経大論集, 60(2), 93-103.

註

- 1) 本テストの最高スコアは990点。
- 2) G-TELPとACE Placementに関しては、吉田(2009)による各社への問い合わせを参照。